CISMOR VOICE
October 2020 vol. 31
同志社大学 一神教学際研究センター
CISMOR
Center for Interdiscipinaly Studies of Monotheistic Religions

センター長報告

半年の活動を振り返って

今号の*CISMOR VOICE*は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）のパンデミックが依然として世界中の多くの人々の命を脅かしている間に刊行されました。夏の間、病気の広がり方はいくぶん緩やかでしたが、日本では、秋に半ば通常の生活に戻ることで再燃しているようです。2020年3月以降、当センターは、海外から客員研究員が参加する3つの会議を含め、当初予定していた全ての活動を中止せざるを得ませんでした。5月に予定されていた大規模な国際会議は、最初は延期としましたが、結局今年は中止と致しました。ウイルスに対する恐怖が国家間の移動を止めただけではなく、日本もまた、自発的な封鎖として、1ヶ月半の間、緊急事態宣言下の状況に入りました。日本の人々は、科学者や官僚から助言されたあらゆる予防策を講じただけではなく、自らの意志で可能な限り外出を避けました。大学での教育は、動画録画、ストリーミング、ZoomおよびMicrosoft Teamsプラットフォームの使用を通じて、オンラインへと全面的に移行しました。

私達がオンライン教育という新たな難題に対処しようと努力する中で、この学期は過ぎました。しかし、CISMORでは2020年5月に活動をオンラインで再開し、同月末に本年度最初のワークショップを開催しました。5月以降、当センターの研究員が主催するいくつかのワークショップと、2つの共催ワークショップが開催されました。

オンラインのワークショップは通常よりも短い時間ではありますが、より焦点が絞られた、非常に興味深いものです。オンラインのプラットフォームは、全ての参加者のインターネットが常に安定しているわけではないため、講演が中断されることもありますが、これは私達の時代における、ありふれた問題となっています。

今号で詳細に取り上げられている活動には、本年度最初の若手研究会（2020年5月30日）、イスラエルから2人の学者が参加したユダヤ学に関する国際ワークショップ（2020年9月3日）、古代オリエントの歴史と宗教に関するCISMORリサーチフェローによるワークショップ（2020年9月26日）が含まれます。さらに、当センターは、第20回目のアッシリア学研究会（2020年9月10日）と、研究員の阿部泰士博士の企画による世界における経済状況に関する一連の講演（2020年9月5日、12日）を共催致しました。

次学期に予定の活動は、公開講演会、セミナー、ワークショップなど、いずれもがオンラインで継続されます。私達は、研究者、参加者、ご支援をいただいている皆さまが、この秋と冬を健康で安全に過ごされることを願っています。

（一神教学際研究センター長　Ada Taggar Cohen）

国際会議
公開講演会
シンポジウム
研究会
報告

CISMOR ワークショップ

CISMOR Workshop for Young Scholars

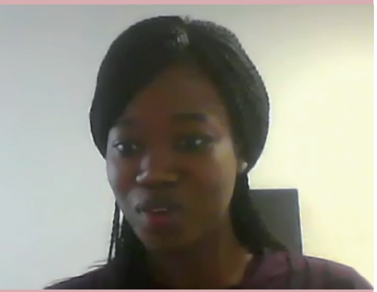
(CISMOR 一神教学際研究会 2020-1)

主催：　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【発表者】 Beishenaliev Kanatbek ほか 5 名（詳細は本文参照）
【日　時】 2020 年 5 月 30 日（土）10:20-14:35
【会　場】 Web 会議システム“Zoom”プラットフォーム

Beishenaliev Kanatbek 氏

Ako Muto 氏



Asmao Diallo 氏

2020 年 5 月 30 日、本年度第 1 回目となる“CISMOR Workshop for Young Scholars (CISMOR 一神教学際研究会 2020-1)”が開催された。

本会の主旨は、大学院生などの若手研究者に研究発表の機会を提供し、また、その発表に対して与えられる研究者からのフィードバックなどを通して、若手研究者の育成を図ることである。今回の研究会では、本学グローバル・スタディーズ研究科博士課程在籍中の大学院生 3 名および本学神学研究科博士課程在籍中の大学院生 3 名による発表が行われた。

具体的なプログラムは次の通りである。

First Session (10:20-12:00) - *Graduate School of Global Studies*
10:20- Opening remarks
Prof. Ada Taggar Cohen（同志社大学神学部・神学研究科教授／ CISMOR センター長）
10:30-11:00
①Beishenaliev Kanatbek（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科）
“Evaluation of Airport Financial Efficiency: Case Study of Manas International Airport OJSC from the Comparative Perspective”
11:00-11:30
②Ako Muto（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科）
“State Legitimacy and Aid: Humanitarian and Development Assistance Mediated During Syria's Civil War”
11:30-12:00
③Asmao Diallo（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科）
“Women's Empowerment, Agency and Collectiveness: Case Study of Mali's Agribusiness Women's Engagement in Agricultural Cooperative”

Second Session (12:55-14:35) - *Graduate School of Theology*
12:55- Opening of the second session
13:00-13:30
④新井 雅貴（同志社大学神学研究科）
「KTU1.161 との比較によるヘブライ語聖書における死者רפאים」
13:30-14:00
⑤鑓谷 秀之（同志社大学神学研究科）
「宗教的言語の慣用化に伴う認知的変化について」
14:00-14:30
⑥山田 陽二（同志社大学神学研究科）
「旧約聖書に於ける礼拝動作ヘブライ語表現の明確化－平伏、お辞儀をする、地面に倒れる－」

14:30-14:35 - Closing remarks

今回の研究会には、本研究センター長であるアダ・タガー・コヘン教授に加え、First Session では当センター幹事である本学グローバル・スタディーズ研究科教授・研究科長の中西久枝氏、本学グローバル・スタディーズ研究科教授の西川由紀子氏、当センターリサーチフェローである本学法学部嘱託講師の西直美氏が、Second Session では当センターリサーチフェローである同志社大学神学部・神学研究科教授の石川立氏、同じく当センターリサーチフェローである同志社大学神学部嘱託講師の平岡光太郎氏および加藤哲平氏が、それぞれコメンテータとして参加された。

以下、今回の発表要旨を発表順に簡単に記す。

①航空輸送は空港や航空会社とともに、十分に発達した市場、金融、情報への直接的なアクセスをもたらすため、航空業界自体の影響は大きい。政府は過去数十年までは世界中における空港の所有者であったが、しかし、金融、イノベーション、経営に関する課題に対処するため、民間セクターを誘致する傾向が広がっている。キルギス共和国は旧ソビエト連邦を構成する共和国の 1 つであり、独立後まもなく他の CIS 諸国と同様に、1997 年に航空輸送民営化プログラムを導入したが、目標は達成されておらず、空港の主要施設の改修に向けて早急な対策を講じる必要がある。本発表では、まず、キルギスタンの空港の所有権と管理、特に現在の空港インフラの状態とその競争力について検討し、次に、マナス国際空港の運営の効率性と、空港に PPP（Public Private Partnership）モデルを導入する必要があるかについて検討するため、ジョージアのトビリシ国際空港とアルメニアのズヴァトルノッツ国際空港との比較を行った。結論として、PPP を通しての民営化の推進、具体的には、関税政策、空港インフラ容量の増進、およびより高い質のサービスの重要性を指摘し、これらを政策提言として掲げた。

②一般的に、先進国および地域・国際機関は、国家主権の正当性の認識および被援助国の合意に基づいて、発展途上国で援助を実施する。しかし、内戦中のアサド政権下のシリアではダイナミックな変化が生じた。シリアに対する国家の正当性の概念は、特に同国への開発援助の場合、競合する政党の介入、人道支援の提供を通じて変更された。本発表では、国家の正当性と援助の合法化が非常に政治的となった内戦において、開発援助を通した平時の国際関係がどのように変化するかを分析した。介入について、国連は介入の根本原理を政治的な仲介から、非介入、政治的介入へと変更したが、一貫性が無く、また、中立的であろうとしたが結果的に不公平であった。アラブ連盟と Friends of Syria Core Group は一貫して反体制を支持したが、2015 年後半、彼ら

研究会参加者 (First Session)

研究会参加者 (Second Session)

は大統領に対する即時辞任の要請を停止し、それは非中立的で偏っていた。介入と非介入の方法論的正当性について、人道主義を超えた援助として、Friends of Syria Core Group の市民社会への援助は一貫していたが偏っていた。人道主義的な援助として、国連は政府地域に限定され、非中立的で偏っていたが、2014 年以降、反体制区での援助を開始し、中立的であろうとした。全体として国際団体は中立的で不偏であろうとした。

③農業は、マリにおける食糧主権であると同様に、経済発展における重要な収入源である。また同国の女性農民は国の農業部門の主な行為者である。マリの小規模な女性農民は、他の開発途上国と同様に、生産、信用貸付、情報へのアクセスが制限されており、市場はしばしば不十分な所有権と高い取引コストによって圧迫されている。男女間の不平等が存在し、女性が自らの資源を管理し、土地を所有することは困難で、人間の安全保障と発展に不可欠な財産権の分配からしばしば除外される。女性の権利の実現に反するのみならず、貧困削減の障害でもあるジェンダー格差を埋めることの決定的な重要性は広く認識されている。マリ政府が、食料の安全保障と男女の平等を達成するための重要な手段と見なされる協同組合を通じて、小規模農家の農業生産者の市場志向を強化および拡大することに焦点を当てた農業政策と戦略に着手したのはこの文脈である。協同組合は、持続可能な開発に不可欠なコミュニティを構築および強化する際の協力と集団行動のための実用的な手段である。本発表では、女性の協同組合の実態と、協同組合における活動を通じた彼らの経験についての口述報告を分析する。さらに、農業協同組合への女性の関与が、彼らの土地所有権を強化し、農業ビジネス活動を促進し、農村地域の貧困を緩和する可能性のある投入資本および製品市場へのアクセスを促進できる範囲についても調査する。

④本研究は、ヘブライ語聖書における死者רפאיםの性質を明らかにすることを目的とする。ヘブライ語のרפאיםは、ウガリト語で王家の祖先とされる死者集団 rp'm と同語根である。そのため、本研究はウガリトの儀礼文書 KTU1.161 を取り上げ、祭儀における rp'm の役割と、ヘブライ聖書内のרפאיםに関する言及の比較を行う。この分析により両者の関連を考察し、また古代イスラエルの宗教における死者儀礼を位置付ける。

⑤本発表は、「慣用化によって、宗教的言語の認知的機能にどのような変化が生ずるのか」を明らかにし、慣用化の役割を再検討することを目的とする。リクールによると、宗教的言語は詩的言語の一種であり、多義性を特徴とする。詩的言語の性質は、生きた隠喩（慣用化されていない目新しい隠喩）において最も顕著に発揮される。このことから、彼は慣用化にともなう意味の平板化に対して否定的な見解を述べる。確かに、隠喩の慣用化とは、徐々に意味がすり減り、一義化への道をたどることであり、言語としての豊穣性を喪失するプロセスである。しかし、隠喩的意味の慣用化とは、すなわち、その意味が集団の承認を得るということでもある。ティリッヒによると、あらゆる象徴は、集合的無意識の承認を得ることによって初めて、象徴となることができる。その中でも、宗教的象徴は、人間の内面の最深部を開示する働きを持つ。また、レイコフによると、隠喩はわれわれの認知に深く関わるものであり、隠喩なくしてわれわれは、時間や空間を認識することすらできない。認知にかかわる隠喩とは、死んだ隠喩のさらに慣用化された状態、すなわち、隠喩であることを通常意識することのない隠喩である。以上の考えを総合すると、宗教的言語は慣用化によって、個人レベルでの認知的機能から、集団レベルでの機能へ、最終的には人間の最も基本的な認知や、人間存在の究極的次元にかかわるものへと変容する。よって、宗教的言語の慣用化とは、その意味が、意識から無意識へ、さらには個人から集団へと引き渡されるプロセスであるとして、肯定的に捉えることが可能と考えられる。

⑥本研究は、旧約聖書における礼拝動作に注目する。旧約聖書においては、アブラム・モーセをはじめ様々な人が（誰が）、主・王・兄弟等これも様々な人に（誰に）礼拝をしている。そこに使われているヘブライ語が多岐にわたり、その訳もバラツキが多い。そこで、その動作を表す動詞のⒶヘブライ語、Ⓑ英語・日本語訳、Ⓒ他の動詞・前置詞・名詞等との関連、Ⓓ図像（図像学上の絵、象徴的表現形式）、との関連付を行い、ある種のパターン化、類型化を図る。これにより、現段階では不明確なヘブライ語の意味を明確にする。

上記の様に、今回も多種多様な発表内容であった。また今回は、各セクションの発表者数に対しコメンテータ数がいずれも同数以上とあり、フィードバック層の厚い贅沢な内容であった。

本会は、件の感染症騒動について未だ収束の兆しがない中で行われた当センター初のオンライン研究会であり、試行錯誤の中で催されたものであった。様々な不便さの下ではあったが、発表者やコメンテータの参加状況を鑑みると、少なくとも移動面の制約が取り払われたという利点に於いて、オンライン研究会ならではの有用性が発揮されたものと確信している。今後も若手研究者の積極的な参加が期待される。

（CISMOR リサーチフェロー　阿部泰士）

新井雅貴氏

鍵谷秀之氏

山田陽二氏

Zvi Stampfer 氏

Amir Ashur 氏

Ada Taggar Cohen 氏

CISMOR ワークショップ

CISMOR International Workshop on Jewish Perspectives of Law: Divine Law – Prohibitions and Restrictions in Jewish Legal System in Historical Perspective

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【企画者】 Ada Taggar Cohen（同志社大学神学部・神学研究科教授
／一神教学際研究センター長）

【発表者】 Zvi Stampfer ほか 6 名（詳細は本文参照）

【日 時】 2020 年 9 月 3 日（木）8:30-12:25（イスラエル時間）// 14:30-18:25（日本時間）

【会 場】 Web 会議システム "Zoom" プラットフォーム

2020 年 9 月 3 日(木)、ユダヤ学に関する International Workshop が、ウェブ会議システム (Zoom) を用いて開催された。テーマは "Divine Law – Prohibitions and Restrictions in Jewish Legal System in Historical Perspective" というもので、古代に源を持つ、テキストに残されたユダヤ教の宗教的な法による禁止や制限に関して、中世初期のイスラームについても視野に入れながら、「神の法 (Devine Law)」をキーワードにして、聖書以前の時代から中世に至るまでの歴史的観点から考察を行うというものであった。神の法は、それによって世界を運営していく、神々から人間社会への実体のある命令の一部と見なされる。そしてそれぞれの法体系は、それが与えられた社会における、分裂や混乱に対抗する規範の明示である。今回の研究発表は、社会的文脈における宗教的制限に関する法的概念を提供する一般的なもの、それから、聖書、ラビ文書、ゲニザ写本、中世初期に関する文書研究を含む、結婚の合意に関する法的な側面に注目するものとに大別された。

具体的なプログラムと発表者については、以下の通りである。

8:35-9:05 // 14:35-15:05
Zvi Stampfer (Head of The Research Authority, Orot Israel College, Israel and the Editor of Ginzei-Qedem: Genizah Research Annual)
"The Credible Witness: Restrictions on Testimony in Jewish Family Law as formulated in the Judaeo-Islamic Milieu"

9:05-9:35//15:05-15:35
Amir Ashur (Research Fellow, Tel Aviv University and Orot College Research Authority, Israel)
"Protecting the Wife's Rights in Marriage as Reflected in Contracts from the Cairo Geniza and Parallel Arabic Sources"

9:40-10:10//15:40-16:10
Ada Taggar Cohen (Professor of Bible, Ancient Near East and Jewish Studies Graduate School of Theology, Doshisha University)
"A Glance at the Status of Women through Legal Texts from Elephantine and Later Jewish Documents from Israel"

10:10-10:40//16:10-16:40
Tetsu Kitamura (Part-time Lecturer, School of Theology, Doshisha University)
"The Priestly Way of Making New World: Ezekiel's Division between Holy and Profane against Exile"

10:50-11:20//16:50-17:20
Etsuko Katsumata (Professor of Jewish Studies, Graduate School of Theology, Doshisha University)
"Intermarriage between Sons of God and Daughters of Men (Genesis Chapter 6) according to the Ancient Jewish Literature"

11:20-11:50//17:20-17:50
Kotaro Hiraoka (Part-time Lecturer, School of Theology, Doshisha University)
"Maimonides' attitude towards Karaite people"

11:50-12: 20//17:50-18:20
Hideharu Shimada (Part-time lecturer, Rikkyo University)
"The restriction of receiving interest and the Code of Maimonides"

それぞれの発表の趣旨は以下のようなものである。

Prof. Stampfer の発表は、中世のユダヤ教とイスラームの共存世界で規定された、ユダヤの家族法における証言上の制限に関するものであり、聖書やタルムード、中世の社会史、神学や裁判の展開などに言及する広範な内容だった。多数派であるイスラームの法廷や法体系に対して少数派だったユダヤ教徒は従ったことなどが紹介された。

研究会参加者

Tetsu Kitamura 氏

Etsuko Katsumata 氏

Kotaro Hiraoka 氏

Hideharu Shimada 氏

Prof. Ashur の発表は、カイロ・ゲニザ由来の契約書やそれに並行するアラビア語の資料に表された、結婚における女性の権利の保護に関するもので、夫が数年以上家を離れた場合の妻や家族の生活の糧に関する記述や、一定期間家を離れる場合の妻の同意の必要性、同様のケースにおけるイスラームとの並行性と相違点（結婚と離婚の条件など）などが紹介された。

Prof. Taggar Cohen の発表は、エジプトのエレファンティネの法的文書（19 世紀初頭から 20 世紀初頭において発見）や、それより後のイスラエルに保存されたユダヤの資料を通して、女性の立場を確認するというものだった。エレファンティネの文書はアラム語で、前 6 世紀後半から前 5 世紀末までに書かれたものであり、ヘブライ語聖書由来の人名や神名（「ヤフー」）、メソポタミアの神々の名前などを含んでいる。発表では、前 15 世紀の北メソポタミアの影響から後 1 世紀までにわたる、古代ユダヤの系譜における結婚契約の重要性や女性の権利などが紹介された。

Dr. Kitamura の発表は、ヘブライ語聖書の預言書の一書である『エゼキエル書』に記された制限に関する律法の意義について検討するものだった。新生イスラエルの在り方を記した同書の 40-48 章では、「聖と汚れ」がひとつの共通テーマとして確認されるが、それは単に区別を示すだけではなく、捕囚という破局的な状況に対する応答としての世界の創出（コスモゴニー）として理解されるべきであることが主張された。

Prof. Katsumata の発表は、創世記 6 章に記される神の子（ネフィリム）と人間の娘との関係に関する古代ユダヤ教文学、特にラビ文献やタルグム、中世の註解書などにおける記述を確認するものだった。黙示文学では神的存在としての神の子の表現は一般的だが、ラビ文献においてユダヤの賢者達はネフェリムを神の子や天使と認めず、その神秘的側面は失われていった。また、人間の娘たちとの関係については、不道徳的な性的関係、もっとも厳しく罰せられるものと見做した。

Dr. Hiraoka の発表は、A. J. ヘシェルの『マイモニデス伝』に沿いながら、マイモニデスのカライ派への態度を検討するものだった。８世紀にアナン・ベン・ダヴィッドによって創始されたカライ派は 10 世紀以降、ラビ・ユダヤ教の口伝律法（ミシュナ・タルムード）を否定し、また、イスラームに強制改宗させられたユダヤ人に否定的な態度をとった。マイモニデスはユダヤ教からのカライ派の分離を主張したが、同時にラビ・ユダヤ教への回帰を期待していたのではないかとの指摘がなされた。

Dr. Shimada の発表は、利子を受け取ることのユダヤ教における禁止を主題とするものだった。同胞への利子の禁止を記した申命記 23 章 20–21 節を踏まえ、それがユダヤの伝統的議論において、弱い立場にある同胞への対応に関する正義の中心であったこと、そして利子を伴う貸付を回避するため、早い段階から対外的な協力関係を求めたことが紹介された。その協力（＝協業）は、イスラーム支配の中世における、イスラームとの関係も含むものであることなどが、カイロ･ゲニザの文書やマイモニデスの『ミシュネ・トーラー』などから確認された。またイスラーム世界では「法人」という概念は存在せず、そのことが株式会社の未発達などにつながったのではないかと指摘された。

上記、イスラエルから 2 名、日本から 5 名の研究発表者と聴講者をあわせた 13 名によって、活発な質疑応答がなされた。

（CISMOR リサーチフェロー　北村徹）

CISMOR リサーチフェロー研究会

古代中近東
(Ancient Near Eastern Studies)

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【企画者】 山本 孟（同志社大学神学部・日本学術振興会特別研究員）
【発表者】 山本 孟 ほか 3 名（詳細は本文参照）
【日　時】 2020 年 9 月 26 日（土）17:30-20:00
【会　場】 Web 会議システム "Zoom" プラットフォーム

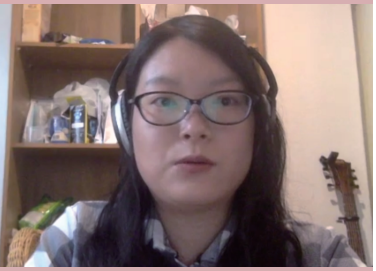
山本孟氏

2020 年 9 月 26 日（土）、Zoom ミーティングにて「CISMOR リサーチフェロー研究会 : 古代中近東」が開催された。本研究会では、古代中近東（エジプト・アナトリア・ヘブライ語聖書世界）の「冥界」をテーマに、文献学を専門とする若手研究者による発表を行い、それぞれの研究についての報告を行って意見交換し、今後の研究に役立てることを主旨としていた。同会のコーディネーターは CISMOR リサーチフェローの山本孟が務めた。

各発表は全体で 30 分間（15 分間の報告と 15 分間の質疑応答）であった。プログラムは以下の通りである。

17:40-18:10　山本 孟（同志社大学）
「ヒッタイトにおける『冥界』理解について」
18:10-18:40　大亦 菜々恵（マールブルク大学）
「SFL の談話分析を用いた王と神々の関係性の分析」
18:50-19:20　肥後 時尚（金沢大学）
「古代エジプト人の死後の世界について」
19:20-19:50　新井 雅貴（同志社大学）
「ヘブライ語聖書における冥界と死者」

上記の発表者のほか、東洋英和女学院大学名誉教授の渡辺和子先生と、同志社大学神学部教授・CISMOR センター長のアダ・タガー・コヘン先生、同志社大学 CISMOR 特別研究員の北村徹先生をコメンテーターとしてお招きし、それぞれの発表についてコメントをいただいた。



大亦菜々恵氏

各発表者は、それぞれが専門とする古代アナトリアと古代エジプト、聖書世界における「冥界」に関するこれまでの研究および今後の研究の展望について報告した。最初の発表者である山本孟は、ヒッタイト文書における「冥界」に関する言及をいくつか取り上げ、冥界がどのような世界であると言及されるのかについて整理し、今後の研究の方針について発表した。ヒッタイト王国は、楔形文字の使用を始め、メソポタミアからの文化的影響を強く受けていた。あるヒッタイトの儀礼文書では暗黒の世界と理解されていたことが示されるが、一方で、別の文書では、王の霊が向かうべき先は「冥界の牧草地」であると表現されることもあり、冥界のイメージに差があることを指摘した。今後は、ヒッタイト時代のアナトリアにおける冥界観の理解のため、冥界や冥界の神々に言及する文書をさらに収集・整理することを目指している。また、それぞれの言及を理解する上では、王国の多様な文化的背景と歴史的変遷を理解する必要があることも示した。発表に対して、コメンテーターの渡辺和子先生からは、ヒッタイトを含む古代近東の宗教は民俗宗教であることから、その点で日本の民俗宗教などと比較することで、その多層性を理解できるという可能性など、ご助言をいただいた。

次の発表者である大亦菜々恵氏（「SFL の談話分析を用いた王と神々の関係性の分析」）は、言語学の視点からヒッタイトの冥界理解に対するアプローチを提示した。SFL (Systemic Functional Linguistics、選択体系機能言語学) は、テキストを質的・量的分析することを可能にするため、談話分析などに広く応用されている。SFL では、テキストは、観念構成的意味・対人関係的意味・テキスト形成的意味を同時に表すと考えられており、中でも対人関係的意味は、話し手と聞き手の力関係、親密さなどが、言語の実現として、呼びかけの方法、使われる構文 (Mood、叙法)、話される内容や長さなどに影響を及ぼすことが知られている。大亦氏は、発表において、ヒッタイト語のコーパスのうち、話し手が特定の聞き手に語りかける文体のテキストとして、祈祷文書と書簡をあげ、ヒッタイト語では話し手と聞き手の

研究会参加者

肥後時尚氏

関係性が変わることによって、どのように言語的特徴が変化するのかについて分析した。最後に祈祷文書を用いて、書かれた年代や聞き手となる神の違いによって言語的特徴が異なることの実例が提示された。コメンテーターのアダ・コヘン先生からは、この分析にあたって、各表現の文脈や歴史・文化的背景を理解することが重要である点等について、ご指摘をいただいた。

休憩を挟んで後半の発表では、古代アナトリアのヒッタイト王国以外の、古代世界の冥界についての発表があった。次の肥後時尚氏（「古代エジプト人の死後の世界について」）からは、古代エジプトの死後の世界観についての報告があった。オシリスによる「死者の裁判」に知られるように、古代エジプト人は死後の世界の存在や死後の復活を強く信じていた。その内容は種々の文献史料のなかで詳細に記述され、彼らが複雑な死後の世界を思い描いていたことがうかがえる。しかし、3000 年におよぶ時代の変化に伴い、死後の世界のイメージや信仰の重要性は大きく変化したため、変化の内容や背景の考察が古代エジプトの文化史研究の重要な課題の一つとなっている。肥後氏は、発表において古代近東地域における死後の世界の理解を目指す研究の一つとして、各時代のエジプトの史料に記述された死後の内容、特に新王国時代以降に重要視されたテーマである「死者の裁判」に焦点を置き、死後の世界と生前の道徳的行為との関係について考察した。発表後、コメンテーターの渡辺和子先生からは、古代エジプトにおける死後の世界と、メソポタミアの死後の世界の違い等について、ご指摘をいただいた。

新井雅貴氏（「ヘブライ語聖書における冥界と死者」）は、ヘブライ語聖書における冥界とその同義語、またそこに存在する死者の性質に着目し、「墓」と比較しながら、その特徴について考察した。ヘブライ語では冥界は שאול(*šᵉʾôl*) と呼ばれた。その同義語である貯水穴 בור(*bôr*) という語に着目すると、それは死者のための儀礼の場としての墓とは異なり、死者を侮辱する目的で死体を遺棄するために転用された穴であることがうかがえる。また、そのような死者は神に見捨てられた存在であるとされたことも指摘された。したがって、冥界に下った死者は墓を介して地上に来ることができないものと考えられたことが理解される。ヘブライ語聖書は、冥界にいる死者を無力な存在として描くことで、ヤハウェ宗教に反する死者儀礼を間接的に否定していたのだという点が明らかにされた。コメンテーターのアダ・コヘン先生からは、発表内容に関連して、聖書において祭司と関係して語られる死が、通常の人々の死とは異なるという見解等のご指摘をいただいた。

今回の CISMOR フェロー研究会では、冥界をテーマとして、これからの研究に向けて、それぞれの発表者がこれまでの研究や今後の研究の展望などを発表し、かつ参加者らと共同で研究できる可能性を話し合える機会にすることを目的としていた。コメンテーターの先生がたからは、上に示した宗教学・歴史学研究の方法に関わるご助言から、個別的な事象に関する知識を含めて、多くをご教授いただいた。また、ご専門にかかわる発表だけでなく、すべての発表に対して有益で、また非常に建設的なご意見をいただきました。この場をお借りしてお越しいただいた先生がたには深謝申し上げます。コーディネーターとしても、各発表とそれに対していただいたフィードバックは、今後の研究を計画する上で非常に有益であった。各発表者にとってもこれらが今後の研究に活かされることを期待している。

（CISMOR リサーチフェロー　山本孟）

新井雅貴氏

2020 年度前半
活動報告

主催イベント
【オンライン開催】

2020 年 5 月 30 日（土）
▼CISMOR ワークショップ
CISMOR Workshop for Young Scholars
（CISMOR 一神教学際研究会 2020-1）
発表者：Beishenaliev Kanatbek ほか 5 名（詳細は本文参照）
会場：Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2020 年 9 月 3 日（木）
▼CISMOR ワークショップ
“CISMOR International Workshop on Jewish Perspectives of Law: Divine Law – Prohibitions and Restrictions in Jewish Legal System in Historical Perspective”
企画者：Ada Taggar Cohen（CISMOR センター長）
発表者：Zvi Stampfer ほか 6 名（詳細は本文参照）
会場：Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2020 年 9 月 26 日（土）
▼CISMOR リサーチフェロー研究会
「古代中近東」
（“Ancient Near Eastern Studies”）
企画者：山本 孟（CISMOR リサーチフェロー）
発表者：山本 孟 ほか 3 名（詳細は本文参照）
会場：Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

共催イベント
【オンライン開催】

2020 年 9 月 5 日（土）
▼オンライン講演会・研究会（野村マネジメント・スクール助成研究）
「中国の経済発展と『曖昧な制度』」
講師：横井 和彦
（同志社大学経済学部・経済学研究科教授）
会場：Web 会議システム “Microsoft Teams” プラットフォーム
主催：野村マネジメント・スクール研究助成（研究代表者 阿部泰士、同志社大学）

2020 年 9 月 10 日（木）
▼ワークショップ
第 20 回アッシリア学研究会
発表者：Chuichiro Aoshima ほか 5 名
会場：Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム
主催：アッシリア学研究会（代表 渡辺和子、東洋英和女学院大学名誉教授）

2020 年 9 月 12 日（土）
▼オンライン講演会・研究会（野村マネジメント・スクール助成研究）
「マーケティングとブランディング」
講師：林 廣茂
（元同志社大学大学院ビジネス研究科教授／西安交通大学管理大学院客員教授）
会場：Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム
主催：野村マネジメント・スクール研究助成（研究代表者 阿部泰士、同志社大学）

お知らせ
CISMOR の出版物である『一神教学際研究 (JISMOR)』と『一神教世界 (WMR)』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでの PDF ファイル公開などによる電子版への移行を進めてきました。これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

CISMOR 最新情報を発信中です

http://www.cismor.jp

CISMOR ウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧いただけます。

発　行　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）　TEL　075-251-3972　FAX　075-251-3092
〒602-8580　京都市上京区今出川烏丸通東入　E-mail　rc-issin@mail.doshisha.ac.jp
編　集　CISMOR 編集事務局　journal@cismor.jp